

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

——『古今集』と『新古今集』における贈答歌を核とした歌群の構造について——

今川 仁 視

本誌第四号と五号では、『古今集』と『新古今集』の「春歌上」巻頭の歌群の構造について考察し、歌群が、〈歌群の主題を示す語句〉・〈その他の共通語句〉・〈配列順を示す一連の語句〉という三つの基準によって編集されていることを明らかにした。

しかしこれまでの考察過程を振り返ってみると、次の問題についてさらに検討を加えることが必要であると思われる。

①二首一対の歌について

歌群を構成している歌は、まず歌群の主題を示す語句によって互いに連鎖している。この事実が、歌群の編者は、まず撰歌の段階で歌材の中に歌群の同じ主題をもつ歌を何首か——それは二首の場合もあるうし、数首の場合、あるいは補足的な一首の場合もあるう——見つけ出し、特定の主題をもった歌群に配当したことを示している。

ところで、『古今集』や『新古今集』の春・夏・秋など各部の巻頭と巻軸の歌及び各部を構成している歌群の内部の歌は、関連する語句という視点から見ると、二首の歌のもっている、歌群の主題を示す語句とその他の関連語句とが同じであるか似通っており、連鎖が密接である場合が少なくない。何故そうなっているのだろうか？

②その他の関連語句について

同じ歌群内の歌は、歌群の主題を示す語句を共通にもっており、これによって互いに関連＝連鎖している。しかし同じ歌群内の歌が、

その他の関連語句によっても互いに関連＝連鎖していることが多いが、これは何故なのか？

③歌の意味内容の変容について

歌群を構成している個々の歌の語句や歌の意味は、相互に関連する語句の連鎖によって変容することがあるが、何故そうした変容が起るのだろうか？

④歌の配列順を決める語句以外の語句について

歌群が二首以上の歌から構成されている場合、それらの歌は、配列順を決める「一連の語句」によって配列され、歌織物による物語、つまり歌物語が浮き彫りになってくるが、その場合、それぞれの歌の本文のうち、「一連の語句」以外の語句は、その歌群の中でどういう意味をもっているのだろうか？ それとも全く意味をもっていないのだろうか？

⑤歌群の編集上、詞書が果たす役割について

歌群の編集は、歌物語という一種のフィクションを創造することの意味するが、歌群の編集に際して、個々の歌に添えられている詞書はどういう役割を果たすのだろうか？

⑥歌群の編集上、歌の作者の果たす役割について

歌群の編集は歌物語という一種のフィクションの創造を意味するとなると、その歌物語の中で、個々の歌の作者（歌人）はどういう

役割を果たすのだろうか？

以上の問題点のうち最も重要なのは、最初の、『古今集』や『新古今集』の歌群には何故二首一対になっている歌が多いのか、という点であると考えられる。この点について考えようとするとき、まず思い浮かぶのは、『古今集』や『新古今集』の編者たちが歌群を編集する際、その念頭にあったのは、歌合で左右に番えられた二首の歌か、贈答歌のどちらかであろうということである。

まず、歌合の左右一対の歌について見ると、『古今集』の編纂の際には「寛平御時后宮歌合」や「是貞親王家歌合」などが、『新古今集』の場合には「千五百番歌合」や「水無瀬恋十五首歌合」・「六百番歌合」などが重要な素材となったが、しかしこれらの歌合から、左右に番えられた歌二首がそのまま並列して収載されている例は極めて少ない。歌合の原典の中には欠損部分を含むものもあるので、その組数を確定することはできないが、『古今集』と『新古今集』の両方の例を合わせても、十組（歌数にして二〇首）を越えることはないと考えられる。ところが贈答歌については事情が大きく異なる。贈答歌の場合は、『古今集』と『新古今集』のいずれも、二首一対のままで収載されている場合がそれほど多くはないが目につく。この事実が、『古今集』や『新古今集』の歌群の編集の際、編者は、配当された歌の組合せや配列に際して、二首一対の贈答歌を念頭に置きながら作業を進めたことを推測させる。

そこで本稿では、まず『古今集』と『新古今集』における贈答歌の実態を明らかにし、その上で、これまで拙稿で続けてきた歌群の編集の考察をもう一步深めることにしたいと思う。

歌の詞書・作者・本文は、考察の都合上、前稿に引き続き、『古今集』については松田武夫『古今集の構造に関する研究』（風間書房一九六五年。以下、『構造』と略称。）に、『新古今集』については田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（岩波書店 新日本古典文学大

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（5）

系一一一九九二年。以下、『新大系版』と略称。）による。

一 『古今集』と『新古今集』の贈答歌の概要

『古今集』（雑体の部を除く）と『新古今集』における贈答歌の分布状況は次の通りである。

（表1）

新古今集	古今集	部	立
3	1	春	傷別
1	0	夏	離
1	0	秋	物
1	0	冬	恋
1	0	賀	恋
1	0	哀	恋
3	1	離	恋
1	0	羈	恋
1	1	物	恋
—	1	恋	恋
4	1	恋	恋
1	3	恋	恋
3	0	恋	恋
1	3	恋	恋
3	2	恋	恋
4	7	雑	雑
1	—	神	神
2	—	積	積
1	0	教	教
—	—	大	大
—	0	歌	歌
6	2	所	所
9	0	組	組
1	4	数	数
3	0	計	計
8	0	歌	歌
1	1	総	総
9	1	歌	歌
7	1		
8	1		

註 『新大系版』の『新古今集』の「巻第一八 雑歌下」の一七九七と一七九八の二首のうち、後者の詞書は「題しらず」となっているが、この二首は贈答歌なので、左の（表1）では「雑」に含めた。

右の表に見るように、贈答歌は、『古今集』と『新古今集』には全部で八八組、歌数にして一七八首ある。このうち『古今集』には二〇組（四〇首）収載されており、恋歌が一〇組、雑歌が七組と多い。『新古今集』には六九組が収載されており、雑歌の二四組、恋歌の二一組、哀傷歌の一組が目立っている。

ところで、ここで留意すべきことは、『古今集』と『新古今集』では、これらの贈答歌は、歌群の編集過程で、二首一対の歌がそのまま配当され、一つの歌群として他の歌群とともに並列されている場合もある。しかしこれよりはるかに多いのは、贈答歌を核として、その前

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

後に他の歌が組み合わされて一つの歌群を構成している場合であり、中には複数の贈答歌が連続して一つの歌群の核を構成している場合もある。

こうした贈答歌を核とした歌群は次の五つのタイプに分類できる。

- A 贈答歌がそのまま一つの歌群となっている場合
- B 贈答歌の前に他の歌が組み合わされている歌群
- C 贈答歌の後にその他の歌が組み合わされている歌群
- D 贈答歌の前と後にその他の歌が組み合わされている歌群
- E 複数の贈答歌が歌群の核になっている場合

『古今集』と『新古今集』における贈答歌を核とした歌群を、タイプ別に分類すると次のようになる。(単位・組)

(表2)

歌群の型	古今集	新古今集
A	2	8
B	9	10
C	4	26
D	1	15
E	2	5
計	18	64

註 右の表の贈答歌を含む歌群の合計は、先の(表1)の歌群の合計より少ない。これは、右の表のE型の歌群は、それぞれが複数の贈答歌を含んでいるためである。

右の表に見るように、贈答歌の二首だけで歌群を構成している場合(A型)の占める割合は、『古今集』でも『新古今集』の場合でも二割以下であり、後はすべて贈答歌を核としてその前後に歌を組み合わせた歌群である。

そこで考察の方法として、まず贈答歌とこれを核にした歌群の構造について考察し、その結果を踏まえ、贈答歌を含まないその他の歌群の構造の実態を考察するための糸口を明らかにしたいと思う。というのは、核となる贈答歌を含まない歌群の数は圧倒的に多いが、適当な

核となる贈答歌がない場合は、編者が、贈答歌に似た二首一対の歌を多くの歌材の中から選び出し、それを核に仕立てて歌群を編集することとは、贈答歌のやりとりが日常生活の中で手馴れたものであった編者たちにとっては、そう難しいことではなかったと考えられるからである。

そこで以下、『古今集』『新古今集』の順に、それぞれの歌群のタイプ別の事例を一つずつ選び出し、その構造を考察していくことにしたい。

二 贈答歌を核にした歌群の構造

(一)『古今集』における贈答歌を核とした歌群

A 贈答歌がそのまま一つの歌群となっている例

巻第十七 雑歌上

「さらぬ別れ」

業平朝臣の母のみこ、長岡に住み侍りける時に、業平宮仕へすとて、時々もえまかりとぶらはず侍りければ、師走ばかりに、母のみこのもとより、とみの事とて、ふみをもてまうで来たり。あけてみれば、ことはなくてあ

りける歌

九〇〇 老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まほしき君か

な

返し

業平朝臣

九〇一 世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため
歌番号を□で囲んだ歌は贈答歌であることを示す。以下同じ。

この贈答歌は、『伊勢物語』第八四段から採られ、『古今集』『雑歌上』の八八六から九〇九までの「老い」を詠んだ二四首の歌の中に配

当されたものである。

まず、右の贈答歌を撰歌と配当の視点から見てみる。

(歌群の主題を示す語句) (その他の関連語句)

九〇〇

さらぬ別れ・あり

老いぬ

九〇一

さらぬ別れ・なくもがな

千代もと歎く

この九〇〇と九〇一の二首の主題は共に「さらぬ別れ」であるので、この歌群の主題(標題)は「さらぬ別れ」とするのが適当である。

ところでこの二首は贈答歌なので、当然のことながら、それぞれの歌が共通してもっている「さらぬ別れ」という言葉は、見た目も同じであるだけでなく、その内容も同じである。

業平の母は八六一年(貞観三)九月に亡くなっているので、母の贈歌九〇〇は、恐らく八六一年に近い年の師走に詠まれたものであり、したがってこの九〇〇の「さらぬ別れ」は、そういう母が実際に当時予感したものである。これを受けた業平の答歌九〇一の「さらぬ別れ」も、当然のことながら内容的に共通した面をもっており、九〇〇と九〇一とは、この同じ内容の「さらぬ別れ」によって連鎖している。

九〇〇と九〇一の「老いぬ」と「千代もと歎く」という言葉は、一見すると意味は正反対である。しかしこの贈答歌では、母が「老いぬ」と言ったのを受けて、子の業平は、母の面影を臉に浮かべながら、人の子として心からの願いを込めて「千代もと歎く」と返したのであり、両者は内容的に表裏一体の関係にあり、九〇〇と九〇一の二首はこの関連語句によっても連鎖している。

このように贈答歌では、返歌の作者は、贈歌の作者がその意向や感情を歌に詠み込んだ語句を自分の歌の中に詠み込んだ上で、当意即妙に返していく。その結果、贈答歌には、互いに同じ語句や関連する語句が多くなり、そうした関連語句による贈歌と返歌との連鎖も密接になるのである。

以上は、贈答歌を、撰歌と配当の基準である(関連語句)の視点か

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

ら見た特徴である。

次に、この贈答歌を、配列という視点から見てみる。

歌本文の全文を□で囲んだものは贈歌を、歌本文の上句または下句を□で囲んだものは返歌の中心部分を示す。以下同じ。

九〇〇

老いぬればさらぬ別れもありといへば

いよいよ見まくほしくほしき君かな

九〇一

世の中にさらぬ別れのなくもがな

贈答歌なので、配列順はいうまでもなく贈歌が先に置かれ、返歌がすぐ後に続く。贈歌には、歌の作者の、相手に対する作者の意向や感情が歌の本文全体で示され、歌を贈られた相手は、贈歌に応える形で自分の意向や感情を示す語句を、上句または下句の中に含めて返す。

右の業平親子の贈答歌では、贈歌に対する返歌の中心は、上句「世の中にさらぬ別れもなくもがな」にある。業平は、まず、母親のつる思いの底にある「さらぬ別れ」への恐れを受け止めて返歌の中に詠み込み、次に、母親の「さらぬ別れ」の「あり」に対して「なくもがな」と応えている。

返歌の残りの部分「千代もと歎く人の子のため」は、上句の補足である。したがってこの二首一対の贈答歌を配列という視点から見ると、全体を□で囲んだ贈歌の歌本文に次いで、返歌の□で囲んだ上句を念頭に置きながら配列されていることになる。

そこで、この贈答歌二首からなる歌群の大意は次のようになる。

九〇〇

(母) 私のようにこう年齢をとると、誰もが避けられない

永遠の別れもあると言いますから、ますますそなたに会いたくなります。

九〇一

(子・業平) 私は、この世に避けられない別れなどなけ

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)
ればいいのに、と思います。

B 贈答歌の前に他の歌が組み合わされている歌群の例

巻第一三 恋歌三

「夢かうつつか」

人に会ひて、あしたに詠みてつかはしける

業平朝臣

六四四

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば

いやはかなにもなりにけるかな

業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける時、斎

宮なりける人に、いとみそかに会ひて、又の

あしたに、人やるすべなくて、思ひをりける

間に、おんなのもとよりおこせたりける

読人不知

六四五

君やこし我やゆきけむ思ほえず夢かうつつかねてかさめてか

返し

業平朝臣

六四六

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは世人さだめよ

この歌群の歌に含まれている関連語句を摘記すると次のようになる、

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

六四四

寝ぬる夜の夢・はかなみ

はかなにもなり

六四五

夢かうつつか・ねてかさめてか

おもほえず

六四六

夢うつつ

まどひ

このB型の歌群の配列で留意すべき点は、先頭の六四四と次の贈歌六四五との関連である。

まず、右の関連語句が示しているように、先頭の六四四は、次の六四五と三組の関連語句によって連鎖している。六四四の昨夜の「寝ぬる夜の夢」と六四五の「夢」とは同じで、昨夜の「寝ぬる夜の夢」が「夢かうつつか」の状態であったのである。

ところで六四四と六四五・六四六の贈答歌は、いずれも『伊勢物語』から採られているが、六四四は第一〇三段から、贈答歌の方は第六九

段から採られており、物語の内容は全く異なっている。したがってこの歌群を編集した編者は、『伊勢物語』の二つの段の歌物語を基にしたながら、歌だけによるという意味で純粹の歌物語を新しく創り出したのである。

なお、六四四と贈答歌のそれぞれに添えられている詞書は、贈答歌の方が詳しく、歌物語の筋書きを考えやすい。したがってこの歌群の場合、編者は、贈答歌を先に並び、その詞書きを基に新しい歌物語を創ったと考えられる。

この歌群の贈答歌を核とした配列は次の通りである。

六四四

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば

いやはかなにもなりにけるかな

六四五

君やこし我やゆきけむ思ほえず

夢かうつつかねてかさめてか

六四六

かきくらす心の闇にまどひにき

夢うつつとは世人さだめよ

まず六四四と六四五について――

業平の歌六四四の「寝ぬる夜の夢をはかなみ」に対し、読人不知の歌六四五は、まず、意味内容は同じであるが別の語句「君やこし我やゆきけむ思ほえず」で受け、さらに前歌六四四の「いやはかなにもなりにけるかな」に対して、私は、それどころか、もう「夢かうつつかねてかさめてか」でした、と返した形に仕立てられている。

つまり、この歌群の中では、六四四が、もとは贈歌だった六四五に代わって贈歌に仕立てられ、もとは贈歌だった六四五が、ここでは六四四の返歌になっている。

六四五と六四六について

この二首はもともと贈答歌で、六四五の「君やこし我やゆきけむ思

ほえず」を、六四六では、私もそなたと同じように「かきくらす心の闇にまどひにき」と受け、「夢かうつつかねてかさめてか」という女の覚めやらぬ思いに對し、「夢うつとは世人さだめよ」とはぐらかしながら、女の心をつかもうとしている。

この歌群の編者は、六四五と六四六の重複部分を度外視して歌物語を組み立て、歌を配列している。

歌群の大意は次の通りである。

六四四 (業平) 共寝した昨夜の夢のような逢瀬は、まことにあつけないものだったので、帰ってからもう一度夢を見てはつきりさせようと思いうたた寝をしたのですが、あらためて見た夢は、昨夜以上にはかないものになりました。

六四五 (女) 私なんか、夢であつたのか現実であつたのか、寝ていたのか目覚めていたのかも分かりません。

六四六 (業平) 昨夜のことが夢だったのか、それとも現実だったのか、そんなことは世間の人に決めさせよう。(どちらだつていいではないか、の心)

C 贈答歌の後に他の歌が組み合わされている歌群の例

卷第一八 雑歌下

「君をのみ思ふ」

宗岳大頼が、こしよりまうで来たりける時に、

雪の降りけるを見て、「おのが思ひは、この

雪の如くなむ積もれる」といひける折りに、 躬恒

九七八 君がおもひ雪とつもらばたのまれず

春よりのちはあらじとおもへば

返し

宗岳大頼

九七九 君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪の消ゆるときある

こしなりける人につかはしける

紀貫之

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

九八〇 思ひやるこしのしら山しらねどもひと夜も夢に越えぬ夜ぞなき

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

九七八 君がおもひ 雪とつもらば

九七九 君をのみ思ひこし 雪の消ゆる

九八〇 思ひやる

こし路の白山
こしのしら山

このC型の歌群で留意すべき点は、九七八と九七九との関連である。九八〇の「思ひやる」は、この歌だけを取りあげれば、詞書から判断して、貫之が都から遠く思いを馳せるという意味である。しかしこの歌群の中では、九八〇は、前の返歌九七九に對する返歌に似た歌として配列されている。したがって九八〇の「思ひやる」は、ここでは前歌九七九の「君をのみ思ひこし」と同じ意味内容に変化している。

(贈答歌を核とした配列)

九七八 君がおもひ雪とつもらばたのまれず

春よりのちはあらじとおもへば

九七九 君をのみ思ひこし路の白山は

いつかは雪の消ゆるときある

九八〇 思ひやるこしのしら山しらねども

ひと夜も夢に越えぬ夜ぞなき

まず九七八と九七九について。

大頼の歌九七九は、前歌九七八で躬恒が「君がおもひ雪とつもらば」と詠んでいるのを、「君をのみ思ひこし路の白山」で受け、前歌が「たのまれず」と詠んだのに對して、「白山はいつかは雪の消ゆるときある」と反論している。

九七九と九八〇について

九八〇は貫之の歌である。貫之は、前歌九七九で大頼が、「君をのみ思ひこし路の白山」と詠んだのに對し、自分は「こし路の白山」の

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

ことは知らないが、しかし夢の中で恋しい人に逢えるのなら、「ひと夜も・越えぬ夜ぞなき」と、雲行きがややしくなりそうな躬恒と大頼の二人の間に割って入り、二人をなだめた形に仕立てられている。内容的に重なっている部分を省略すると、この歌群の大意は次のようになる。

九七八

(躬恒) あなたの思いが雪のように積もっているとおっしゃるのなら、信用出来ませんよ。雪は春以降は消えてなくなってしまうだろうと思うので。

九七九

(大頼) (何をおっしゃいます。越路の) 白山は、いったいいつ雪の消える時がありますか？

九八〇

(貫之) (夢の中で好きな人に逢えるのなら) 私は、白山を越えていかない夜など一夜だつてないのになあ。(白山に雪が積もっておろうがおろまいが、の心。)

この歌群は躬恒との贈答歌を中心として編集されている。詞書も贈答歌に添えられたものが詳しいところから推して、この歌群は、まず贈答歌が撰ばれ、次いで九八〇が付け加えられたと考えられる。

D 贈答歌の前後に歌が組み合わされている歌群の例

巻第一七 雑歌上

「たみのの島を問ふ」

題しらず

読人しらず

九一三 難波潟潮満ち来らしあまたみのの島にたづ鳴きわたる

貫之が和泉の国に侍りける時に、大和より

越えまうで来て詠みて遣しける

藤原忠房

九一四 君を思ひおきつの浜に鳴くたづの

たづね来ればぞありとだに聞く

返し

貫之

九一五 おきつ波たかしの浜の浜松の名にこそ君を待ちわたりつれ

九一六 難波にまかれりける時に詠める
海士とぞわれはなりぬべらなる

九一七 住吉とあまはつぐともながるすな人忘れ草おふといふなり
あひ知れりける人の、住吉にまうでけるに詠
みて遣しける
壬生忠岑

九一八 雨によりたみのの島をけふ行けど
難波へまかりける時、たみのの島にて雨に会
ひてよめる
貫之

この歌群は、贈答歌九一四・九一五を中心に、前に九一三が、後に九一六・九一七・九一八の三首が組み合わされ、先に見たB型とC型の複合した形態になっているので、九一三と九一四、九一五と九一六との関連が目すべき点である。

九一七の作者・忠岑は、ここでは九一四の作者・忠房の役をあてがわれていると考えられる。

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

九一三 たみのの島 たづ鳴きわたる

あま衣

難波潟

九一四 おきつの浜 鳴くたづ たづね来れば

たかしの浜

浜松・待ちわたり

九一六 難波潟・海士とぞなりぬべらなる

おふる玉藻

九一七 住吉・ながるすな

おふ・人忘れ草

あま

九一八 名には・隠れぬ

たみのの島

先頭の九一三と贈答九一四は「難波潟」―「おきつの浜」―「たづ鳴きわたる」―「鳴くたづ」の関連語で連鎖し、返歌九一五と九一六は

「たかしの浜」―「難波潟」で連鎖している

九一三の「あま（雨）衣」は、「田蓑」の「蓑」の枕詞であるが、「たづ鳴きわたる」「潮満ちくらし」と詠んでいるところから、また九一六と九一七に「海士」が出てくるところからも、ここでは「海士衣」の意味を含んでいると考えられる。

なお、「たみの（田蓑）の島」「難波潟」「おきつ（興津）の浜」「たかし（高師）の浜」「住吉」「名には（難波）」は、いずれも地理的に近接している地域である。

（贈答歌を核とした配列）

九一三 難波潟潮満ち来らしあま衣たみのの島にたづ鳴きわたる

九一四 君を思ひおきつの浜に鳴くたづの

たづね来ればぞありとだにきく

九一五 おきつ波たかしの浜の浜松の

名にこそ君を待ちわたりつれ

九一六 難波潟おふる玉藻をかりそめの

海士とぞわれはなりぬべらなる

九一七 住吉とあまはつぐともながるすな

人忘れ草おふといふなり

九一八 雨によりたみのの島をけふ行けど

名には隠れぬものにぞありける

九二三と九一四について

九二三の作者「読人しらず」―この歌群の中では貫之を指す―が、九一四の作者・藤原忠房がわざわざ田蓑の島まで訪ねて来てやったの

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（5）

に、

九一三 難波潟潮満ち来らしあま衣たみのの島にたづ鳴きわたる

と、まるで人ごとのように詠んだ。そこで、いささか頭にきた忠房が、いくらお互い親しい仲とは言え、それはあんまりではないかとばかり九一四 君を思ひおきつの浜に鳴くたづのたづね来ればぞありとだにきくと強く言い返した形に配列されている。

九一四は、前歌九一三に「たみのの島にたづ鳴き」とあるのを、「君を思ひおきつの浜に鳴くたづ」で受け、さらに、前歌に「わたる」とあるのに対して、「たづね来ればぞありとだにきく」と返した形に仕立てられている。したがってこの歌群の中では、九一三が贈歌、九一四が返歌に転じている。

九一五について

九一五は、この忠房の前歌九一四の「君を思ひおきつの浜」を、「おきつ波たかしの浜の浜松」で受け、さらに前歌九一四の「たづね来ればぞ」に対して「浜松の名にこそ君を待ちわたりつれ」と反論している。

九一六と九一七について

この二首は、それぞれの詞書からも分かるように、もともととは贈答歌ではないが、この歌群の中では、編者によって贈答歌に仕立てられており、九一七は、前歌九一六の「難波潟おふる玉藻」を「人忘れ草おふ」で受け、さらに前歌の「海士とぞわれはなりぬべらなる」に対して、「住吉とあまはつぐともながるすな」と応えている。

最後の九一八について

九一八は、忠房の前歌九一七の「住吉とあまはつぐともながるすな」という忠告に対し、貫之は、先ほどは、九一六で、「かりそめの海士とぞわれはなりぬべらなる」と言ったが、実は「雨によりたみのの島をけふ行けど」と弁解しながらこの忠告を受け入れ、田蓑という「名には隠れぬものにぞありける」と応えた形に仕立てられている。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

なお、九一八の「隠れ」は、この歌だけを取り上げるときは、「田蓑」に身を隠す、つまり雨にぬれないようにするという意味であるが、前の歌との関連では、「ながる」して島に隠れ住むという意味も含んでいる。

この歌群の大意は、前歌を受けた重複部分を度外視すると、次のようになる。

九一二 (読人しらず 貫之) 難波潟に潮が満ちて来たらしい。

難波潟から、この田蓑の島に鶴が鳴きながら渡ってくる。

九一四 (忠房) あの鶴のように、私があなたのことを気にとめて、この田蓑の島を訪ねて来たからこそ、あなたが健在であるということだけでも分かったのですぞ。

九一五 (貫之) (私だって) あの高師の浜松の「待つ」という名にあやかり、あなたをずっと待ち続けていたのですぞ。

九一六 (貫之) (ところで) 私は、ここで玉藻を刈り始めたが、このまま、まるでにわか仕立ての海士になってしまったようないう気分です。

九一七 (忠房) (しかし) ここは「住み良い所だよ」と田蓑の海士が言っても、長居はしなさんな。

九一八 (貫之) 田蓑という名前だけでは、雨から身をかくすことも出来ず、濡れてしまったからなあ。

この歌群のように歌群が数首で構成されるようになると、歌物語の内容もかなり面白くなる。

E 二組の贈答歌が歌群の核になっている例

巻第一五 恋歌五

「うつりゆく人の心」

題しらず

雲林院のみこ

七八一 吹き迷ふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の

小野小町

七八二 今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

小野貞樹

七八三 人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ

業平の朝臣、紀有常がむすめに住みけるを、

恨むることありて、しばしの間、昼は来て、

夕さは帰りのみしければ、詠みてつかはし

ける

七八四 天雲のよそにも人のなりゆくか

さすがに目には見ゆるものかは

返し

業平朝臣

七八五 ゆきかへり空にのみして経ることは

わがゐる山の風はやみなり

景式王

七八六 唐衣なれば身にこそまっはれめ

かけてのみやは恋ひむと思ひし

友則

七八七 秋風は身をわけてしも吹かなくに

人の心の空になるらむ

源宗于朝臣

七八八 つれもなくなくなり行く人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりける

この歌群は、小野小町と小野貞樹の贈答歌と、在原業平と彼が妻として通っていた紀有常の娘の贈答歌の二組の贈答歌を中心にして、その前後に歌が組み合わされており、B型とC型の結合した形態である。したがってこの二つの型の結び目、つまり七八三と七八四との関連がどうなっているかが注目される。上下の傍線部分は関連語句であることを示す。以下同じ。

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

七八一 人の心・うつりもゆくか

野風

七八二 言の葉さへにうつろひ

時雨

七八三 人を思ふ心・散りも乱れめ

木の葉

風

七八四 よそにも人のなりゆくか

七八五 ゆきかへり空にのみして経る

七八六 かけてのみやは恋ひむ

七八七 人の心の空になるらむ

七八八 つれもなくなり行く

言の葉

秋

秋風

身

身

(贈答歌を核とした配列)

七八一 吹き迷ふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の

七八二 今はとてわが身時雨にふりぬれば

言の葉さへにうつろひにけり

七八三 人を思ふ心木の葉にあらばこそ

風のまにまに散りも乱れめ

七八四 天雲のよそにも人のなりゆくか

さすがに目には見ゆるものかは

七八五 ゆきかへり空にのみして経ることは

わがゐる山の風はやみなり

七八六 唐衣なれば身にこそまづはれめ

かけてのみやは恋ひむと思ひし

七八七 秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心の空になるらむ

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

七八八 つれもなくなり行く人の言の葉ぞ

秋より先の紅葉なりける

この歌群は、有常の娘と業平の贈答歌に添えられた詞書の方が、小町と貞樹の贈答歌に添えられた詞書より詳しく、一見すると、業平らの贈答歌を中心にして編まれたように見える。

しかしこの歌群の先頭歌七八一の主題は「うつりゆく人の心」であるが、小町の贈歌七八二は、「いつまでも」という約束の言葉が色あせてしまったことを問題にしている。これに対し、後の贈答歌では、有常の娘の贈歌七八四は、昼間だけ来て夕方になると帰っていき、心が「よその人」になってしまっている男の行動を問題にし、末尾の七八八で、男のうつりゆく「言の葉」を今一度振りかえり、結局、「秋より先の紅葉」だったのだと締めくくられている。

この歌群のこうした構成から推して、この歌群は、先頭歌の主題「うつりゆく人の心」をテーマにしなが、小町らの贈答歌七八二・七八三に業平らの贈答歌を添えて編まれたものと考えられる。

まず七八二は、前歌七八一の上句「吹き迷ふ野風を寒み秋萩の」を、「今はとてわが身時雨にふりぬれば」で受け、次に前歌の下句「うつりもゆくか人の心の」という問いに対し、その証として「言の葉さへにうつろひにけり」と応えている。したがってこの歌群では、先頭歌七八一が贈答歌の役を果たし、もとの贈答歌七八二はこの先頭歌七八一を補う役に転じている。

次の返歌七八三は、前歌七八二の「今はとてわが身時雨にふりぬれば」を「風のまにまに散りも乱れめ」で受けつつ、前歌の「言の葉さへにうつろひにけり」に対して、「人を思ふ心木の葉にあらばこそ」と反論した形に仕立てられている。

次に、注目すべき七八三と七八四の関連を見ると、七八三の「人を思ふ心木の葉にあらばこそ」に対して、七八四は「天雲のよそにも人

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

のなりゆくかさすがに目には見ゆるものかは」と「うつりゆく人の心」が、言葉だけでなく日頃の行動に表れるに至った点を捉え、厳しく追及する形になっており、七八三と七八四との関連は密接である。

七八五は、七八四の「天雲のよそにも人のなりゆくか」という厳しい追求の言葉を、「ゆきかへり空にのみして経る」で受けた上で、「うつりゆく人の心」を「わがゐる山の風はやみなり」と相手の女の所為にして返している。

七八六は、前歌の「ゆきかへり空にのみして経る」を、ただ氣に「かけてのみやは恋ひむと思ひし」で受け、前歌の「わがゐる山の風はやみなり」に対し、相手を「唐衣」に喩え「唐衣なれば身にこそまつはれめ」と恨みながら反論している。

七八七は、前歌の「かけてのみやは恋ひむと思ひし」を「人の心の空になるらむ」で受けつつ、前歌の「人の心の空になるらむ」について、「秋風は身をわけてしも吹かなく」といぶかり、最後の七八八は、前歌の「人の心の空になるらむ」を「つれもなくなり行く人の言の葉ぞ」で受け、前歌の「秋風は身をわけてしも吹かなく」という不審の念に対して、「秋より先の紅葉なりける」と諦めて終わっている。

(歌群の大意)

七八一 (女) あちらこちらと野を吹き乱れる風が寒いので、秋萩が色変わりしてゆくように、人の心も移っていくのでしょ
うか、

七八二 (女) あなたの言葉もすっかり色あせましたよ。

七八三 (男) あなたを思う私の心が、木の葉のようなものなら、風の吹くまま気ままに乱れ散っているでしょうが・・・

七八四 (女) (しかし) あなたは、大空の雲のようにすっかりよそよそしくなられましたね。もっとも、私の目に見えるところにはおいですが。

七八五

(男) 我が家の山の神の風当たりが、何分にもきつうございますので。

七八六 (女) (何をおっしゃいます。) 私だって、あなたが着慣れた唐衣のようになれ親しめば、あなたの身にまわりつきもしましようが。

七八七 (女) 秋風は、人の体の中を吹き通って、心だけを空に吹きとばすわけでもないのに、

七八八 (女) 秋風が吹く秋がきて私に飽きる前に、そなたの言葉こそ、もうすっかり色変わりしてしまいましたね。

『構造』では、末尾の七八八に続く兵衛の歌七八九を、「自分につらく当たる人のうつりゆく心を責めた点で、他の八首と趣を等しくしている」(五五〇―五五一頁)として「移りゆく人の心」の歌群に含めている。

七八九 死出の山麓を見てぞ帰りにしつらき人よりまづ越えじとて

しかし歌の「趣」という点では、右の歌の、男に対する女の恨みはかなり陰にこもっており、今見た歌群が全体としてもっているやゝ軽妙な趣と相容れない。右の歌は、次の七九〇・七九一とともに「つらき思ひ」の歌群に含める方が適当で、関連語句による歌の連鎖も、七八九「死出の山麓」↓七九〇「かれゆく小野(野原)」↓七九一「冬がれの野(埋葬地)」と編者の視線の推移がはっきりしている。

(二)『新古今集』における贈答歌を核とした歌群

A 贈答歌がそのまゝ一つの歌群となっている例

巻第一〇 羈旅歌

「かりの宿り」

天王寺に詣で侍けるに、俄に雨ふりければ、
江口に宿を借りけるに、貸し侍らざりければ、

よみ侍ける
西行法師
九七八 世中をいとふまでこそかたからめ
かりの宿りをおしむ君かな

返し
遊女妙

九七九 世をいとふ人としきけばかりの宿に
心とむなと思ふばかりぞ

(歌群の主題を示す語句)
(その他の関連語句)

九七八 世中をいとふ かりの宿り
おしむ

九七九 世をいとふ人 かりの宿
心とむな

(贈答歌)

九七八 世中をいとふまでこそかたからめ
かりのやどりをおしむ君かな

九七九 世をいとふ人としきけばかりの宿に
心とむなと思ふばかりぞ

前歌九七八の「世中をいとふまでこそかたからめ」を、七八九は、「世をいとふ人としきけば」で受け、前歌の「かりのやどりをおしむ君かな」に対し、「かりの宿に心とむなと思ふばかりぞ」と媚びをただよわせながら返している。

(歌群の大意)

九七八 (西行) 私のように、この世を仮の宿と考え厭い捨てることまでは難しいだろうが、そなたは、今宵限りの仮の宿を貸すことさへ惜しまれるのか。

九七九 (遊女) あなたは世を厭い出家された人とお聞きしましたので、こんな仮の宿を借りることに執着などなさいますなと思つたまでのことですよ。(他意はございません、よろしかったらどうぞ、の心。)

B 贈答歌の前に他の歌が加わり一つの歌群を構成している例
巻第九 離別歌

「見なれし人の別れ」

題しらず
源重之

八六五 衣川見なれし人のわかれにはたもとまでこそ浪はたちけれ

陸奥国の介にてまかりける時、範永朝臣のも

高階経重朝臣

八六六 行く末に阿武隈川のなかりせば

いかにかせましけふの別れを

藤原範永朝臣

八六七 君に又阿武隈川をまつべきに残りすくなきわれぞかなしき

(歌群の主題を示す語句)
(その他の関連語句)

八六五 見なれし人のわかれ 衣川

八六六 けふの別れ・行く末に阿武隈川

八六七 君に又阿武隈川 まつ

残りすくなき

八六五の「衣川」と八六六・八六七の「阿武隈川」はこの歌群の中では等しい。「衣川」は陸奥国の川。現在の岩手県胆沢群に発し北上川に注ぐ。「阿武隈川」は、同じく陸奥国の川であるが、現在の福島県甲子山から発し太平洋に注ぐ。「阿武隈川」は、もともと「逢ふ」という意味を掛け持っているが、ここでは、八六五の旅立つ人が旅先から帰ってきて、八六七の作者と再び「遇ふ」という意味を含んでいる。

(贈答歌を核とした配列)

八六五 衣川見なれし人のわかれには

たもとまでこそ浪はたちけれ

八六六 行く末に阿武隈川のなかりせば

いかにかせましけふの別れを

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

八六七 君に又阿武隈川をまつべきに

残りすくなきわれぞかなしき

この歌群の先頭の八六五は、先に見た『古今集』のB型の歌群の場合と違って、贈答歌の前置き性格をもっていると考えられる。

八六七は、前歌の「行く末に阿武隈川のなかりせば」を「君に又阿武隈川をまつべきに」で受け、「いかにかせましけふの別れを」という問いに対し、「残りすくなきわれぞかなしき」と返している。

(歌群の大意)

八六五 (重之) 衣川の水のように馴れ親しんできた人との別れには、私の袂にまで、悲しみの涙が衣川の波のように立っている。

八六六 (経重) (しかし) この旅の行く末には、いずれまた逢うという名の阿武隈川がないのならともかく、ちゃんとあって、お互いにまた逢えるのだから・・・。

八六七 (範永) (それはそうだが、しかし) 何分にも余命幾許もない私としてはそのような期待もおぼつかないので、今日の別れが悲しく思われます。

C 贈答歌の後に他の歌が加わり一つの歌群を構成している例
巻第八 哀傷歌

「忘れがたみ」―折りたく柴の夕煙に寄す―

十月許、水無瀬に侍しころ、前大僧正慈円

のもとへ、ぬれて時雨のなど申つかはして、

次の年の神無月に、無常の歌あまた詠みて

つかはし侍し中に

八〇一 思ひいづるおりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘がたみに

返し

太上天皇

前大僧正慈円

八〇二 思ひいづるおりたく柴ときくからに

たぐひしられぬ夕煙かな

雨中の無常といふことを

太上天皇

八〇三 なき人のかたみの雲やしほらん

ゆふべの雨に色はみえねど

枇杷皇太后宮かくれてのち、十月許、かの

家の人々の中に、たれともなくてさしおか

せる

相模

八〇四 神無月しぐるゝころもいかなれやそらにすぎにし秋の宮人

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

八〇一 忘がたみ

思ひいづるおりたく柴の夕煙

八〇二 思ひいづるおりたく柴・夕煙

八〇三 なき人のかたみ

雲

ゆふべの雨・しほる

八〇四 しぐるゝ・ころも

そら

八〇三の「雲」は、この歌群の中では、八〇一と八〇二の茶毘を思い出させる柴の夕煙が、空に昇って雲になったものである。

八〇四の「神無月」は、八〇一の詞書から「次の年の神無月」のこと。「しぐるゝころも」は、時雨の降る頃、時雨のように降る悲しみの涙に濡れた衣の意を含んでいる。この「ころも(衣)」は、前歌の「なき人のかたみ」と連鎖しており、「なき人のかたみ」としての「ころも」である。

「すぎにし」は、「そらに」すぎにしろ、過ぎにし「秋」とを掛けており、「秋」は季節の秋と皇太后・皇后をさしている「秋の宮」とを掛けている。

(贈答歌を核とした配列)

八〇一 思ひいづるおりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘がたみに

八〇二 思ひいづるおりたく柴ときくからに

たぐひしられぬ夕煙かな

八〇三 なき人のかたみの雲やしほるらん

ゆふべの雨に色はみえねど

八〇四 神無月しぐるゝころもいかなれや

そらにすぎにし秋の宮人

八〇一の上句「思ひいづるおりたく柴」を、八〇二は、同じ上句でそのまま受けて「思ひいづるおりたく柴」と詠み、前歌の「忘がたみに」に対して「たぐひしられぬ夕煙かな」と返している。

八〇一・八〇二が「折りたく柴の夕煙」を詠んでいるのに対し、続く八〇三・八〇四は、前二首の「折りたく柴の夕煙」が空に昇り「なき人のかたみ」となった「雲」を詠んだ贈答歌に仕立てられている。

八〇二と八〇三は、「折りたく柴の夕煙」―「なき人のかたみ」―「しほる」「ゆふべの雨」―「しぐるゝころも」「雲」「そら」という関連語句によって連鎖している。

前歌八〇三の「なき人のかたみの雲」を、八〇四は「神無月しぐるゝころも」で受け、前歌の「ゆふべの雨に色はみえねど」に対して、それでもなお眺め続け「そらにすぎにし秋の宮人」と応じた形になっている。

この歌群は、八〇四を含め、後鳥羽院が寵愛した女房・尾張を追悼する形に仕立てられており、この歌物語の中では、八〇四の作者・相模は、後鳥羽院の歌八〇三への返歌を詠む役をあてがわれている。

(歌群の大意)

八〇一 (院) 亡き人のことを思い出している折り、折っては焚

く柴の夕煙にむせびながら泣くのもうれしい。この柴の煙
百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

が、茶毘の煙を思い出させ、忘れがたいあの人を思い出させる忘れ形見だと思うと。

八〇二 (慈円) そううかがいますにつけ、御門の、お亡くなりになった方へのたぐひない愛情のほどがしのばれることのできざいます。

八〇三 (院) 亡き人の形見ともいうべきあの雲も、悲しみの涙にくれて沈んでいるのだろうか、この夕暮れの雨で様子ははっきりとは分からないが。

八〇四 (相模) 去年の秋は、宮仕えの方々も、さぞかし何も手につかず、悲しみの涙に衣を濡らしながら、ただ茫然とお過ごしになったことではございません。

『新大系版』の八〇一の脚註は、八〇一―八〇三までの三首を、「後鳥羽院が寵愛した女房・尾張追悼の小歌群」とし、八〇四の配列については何も触れず、事実上、これを前の三首から独立した一首と見ているが、これでは八〇四がここに配列された意味が分からなくなる。

D 贈答歌の前後に歌が組み合わされている歌群の例

巻第一八 雑歌下

「小萩が上を思ふ」

野分したる朝に、おさなき人をだに問はざりける人

赤染衛門

一八一九 あらく吹く風はいかにと宮城野の小萩がうへを人の問へかし

和泉式部、道貞に忘れられてのち、ほどなく敦

道親王かよふと聞きて、つかはしける

一八二〇 うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛の裏風

返し 和泉式部

一八二一 秋風はすぐく吹けども葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

病限りにおぼえ侍ける時、定家朝臣、中将転任のこと申とて、民部卿範光もとにかくはしける

皇太后宮大夫俊成

一八二二 をざさ原風まつ露の消えやらすこのひとふしを思ひをくかな
赤染衛門と和泉式部との贈答がこの歌群の核になっている。

(歌群の主題を示す語句) (その他の関連語句)

一八一九 小萩がへを人の問へ

宮城野

一八二〇 うつろはで

葛の裏風 信太の森

一八二二 うらみ顔には見えじ

秋風・吹けども・葛の葉

一八二二 ひとふしを思ひをく

風 をざさ原

一八二〇の「信太(しのだ)の森」は、和泉国の枕詞。この歌では和泉式部のかつての夫で和泉守であった道貞を指す。

一八一九の「あらく吹く風」・一八二〇の「葛の裏風」・一八二二の「風」は、この歌群の中では、いずれも一八二二の「ひとく吹く」「秋風(飽き風)」と同じで、ともに夫が飽いた妻に吹かせたひどく冷たい風を意味する。

(贈答歌を核とした配列)

一八一九 あらく吹く風はいかにと宮城野の

小萩がうへを人の問へかし

一八二〇 うつろはでしは信太の森を見よ

かへりもぞする葛の裏風

一八二二 秋風はすぐく吹けども葛の葉の

うらみ顔には見えじとぞ思ふ

一八二二 をざさ原風まつ露の消えやらす

このひとふしを思ひをくかな

一八一九は、この歌群の中では、一八二〇とともに贈答の役を果たしており、一八二二は、この二首の贈答に対して返歌として返す形に編まれている。

最後の「一八二二は、前歌一八二二の「秋風はすぐく吹けども葛の葉の」を「をざさ原風まつ露の消えやらす」で受けた上で、前歌の「うらみ顔には見えじとぞ思ふ」に対し、「このひとふしを思ひをくかな」と応えている。

なお、「このひとふし」は、この一首だけを取り出せば、詞書にあるように、俊成の子定家の近衛少将から中将への昇任の一件のことであるが、この歌群の中では、和泉式部の「わが子のことだけ」を意味しており、子煩悩であった俊成は、ここでは赤染衛門とともに和泉式部の論し役を振り当てられている。

(歌群の大意)

一八一九 (赤染) 私は、あなたのご主人には、せめて「秋風がひどく吹いて寂しくなかったか」と、幼子を見舞ってやってほしいと思います。

一八二〇 (赤染) しかしあなたも、ほかの男に心を移さないで、しばらくご主人の様子を見守っていなさいよ。ひょっとすると、ご主人の心があなたのもとへ戻って来るかも知れませんから。

一八二二 (和泉) 私は、主人を恨んでいるというような顔は見せまいと思っております。

一八二二 (俊成) ひたすらわが子のことだけを気遣ってやることですな。

『新大系版』は、この歌群の前の一八一八の脚注で、一八一八とこの歌群の先頭歌一八一九の二首を、『木』に寄せる雑歌の歌群と区分している。一八一八の「光まつ(松)枝」と一八一九の「宮木野」とを双方の関連語句と見たのであろう。

しかしこの歌群の前の三首一八一六・一八一七・一八一八は、「さゝがにのいとかかりける身のほど」―「ささがにの空にすかく」―「光まつ枝にかかれる露の命」という関連語句で互いに連鎖することによって「露の命」の歌群を構成しており、この三首の歌群の中へ「小萩が上を思ふ」一八一九を含めるのは無理である。

E 二組の贈答歌が核となつて一つの歌群を構成している例

巻第一 恋歌一

「郭公のしのぶね」

五月五日、馬内侍につかはしける

前大納言公任

一〇四三

郭公いつかと待ちしあやめ草

けふはいかなるねにか鳴くべき

返し

馬内侍

一〇四四

さみだれは空おぼれる郭公ときに鳴くねは人もとがめず

兵衛左に侍ける時、五月ばかりに、よそなが

一〇四五

郭公声をば聞けど花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ

返し

馬内侍

一〇四六

郭公しのぶるものを柏木のもりても声のきこえける哉

郭公の鳴きつるは聞きつやと申ける人に

一〇四七

心のみ空になりつつ郭公人だのめなるねこそ鳴かるれ

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

一〇四三

郭公 いかなるねにか鳴くべき

いつか あやめ草

一〇四四

郭公 鳴くねは人もとがめず

ときに さみだれ

一〇四五

郭公 声をば聞けど

物をこそ思へ

一〇四六

郭公 もりても声のきこえける

しのぶる

一〇四七

郭公 ねこそ鳴かるれ

人だのめなる

この歌群の四首はいずれも「郭公」を含んでいる。しかし初めの贈

答歌一〇四三・一〇四四の「郭公」は、贈歌の作者(男)がわが身を郭公になぞらえている。しかし後の贈答歌一〇四五・一〇四六とこれに続く一〇四七の「郭公」は、男が付け文を贈る相手の女を意味している。

(二組の贈答歌を核とした配列)

一〇四三

郭公いつかと待ちしあやめ草

けふはいかなるねにか鳴くべき

一〇四四

さみだれは空おぼれる郭公

ときに鳴くねは人もとがめず

一〇四五

郭公声をば聞けど花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ

一〇四六

郭公しのぶるものを柏木のもりても声のきこえける哉

一〇四七

心のみ空になりつつ郭公人だのめなるねこそ鳴かるれ

一〇四四

は、前歌一〇四三の「郭公いつかと待ちしあやめ草」を

「さみだれは空おぼれる郭公」で受け、前歌の「けふはいかなるねにか鳴くべき」という問いに對し、「ときに鳴くねは人もとがめず」とそっけなく応えている。

後の贈答歌一〇四五・一〇四六では。一〇四六は、前歌一〇四五の

「郭公声をば聞けど」「花の枝にまだふみなれぬ物をこそ思へ」を

「郭公しのぶるものを」で受け、前歌の「郭公声をば聞けど」と心の

うちを知られたのに對して、「柏木のもりても声のきこえける哉」と

返している。

最後の一〇四七は、前歌一〇四六の「柏木のもりても声のきこえける哉」を「心のみ空になりつつ郭公」で受け、その「郭公」(「私自身」は「人だのめなるねこそ鳴かるれ」と返している。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

(歌群の大意)

一〇四三

(公任) 私は、郭公のように、五月五日になるのはいつかと待っていました、今日やっとその日になりました。今日は、どのように鳴いて私の思いをあなたへ打ち明けたらよいのでしょうか。

一〇四四

(内侍) 鳴く季節が来たからといって鳴いても、誰もその声を聞きとがめたりなどしませんよ。

一〇四五

(公任) そなたの声は聞きましたよ。しかしまだ付け文を送り馴れず、ただあれこれと思い悩んでおられるのではないですか。

一〇四六

(内侍) 思いが外に洩れないようにと思っていたのですが、声が洩れ、あなたに聞こえてしまったのです。

一〇四七

(内侍) 私は、頼り甲斐のないあなたを恨み、とうとう声にだして泣いたことです。

この歌群は、二組の贈答歌、とりわけ最初の一〇四三と一〇四四の公任と内侍の贈答歌が基本になっており、一〇四五の作者・法性寺入道前摂政太政大臣(藤原道長)はここでは公任の代役をさせられていると考えられる。

なお、『新大系版』の一〇四二の脚注は、一〇四二と一〇四三と共に「あやめ草」という語を含んでいるからであろう、この二首を「菖蒲に寄せて言ひ出す恋」の歌群としている。しかし一〇四二は、今見た「郭公のしのぶね」の歌群との繋ぎの役を果たすために置かれたもので、一〇四二と一〇四三は関連語句「あやめ草」で連鎖している。

以上で、『古今集』と『新古今集』の贈答歌を核にした歌群のタイプ別の検討を終わる。

次に、以上の検討結果を念頭に置きながら、『古今集』と『新古今集』の贈答歌をほとんど含まない歌群の中から、「春歌上」の「梅」

の歌群を撰んでその構造を考察することにした。

三 『古今集』と『新古今集』の「梅」の歌群の構造

(一)『古今集』の「梅」の歌群の構造

巻第一 春歌上 梅

1 「移り香」

題しらず

読人しらず

〔三三〕

折りつれば袖こそはへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く

〔三三〕

色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ども

〔三四〕

宿近く梅の花植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまりけり

〔三五〕

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみぬる

右の歌番号のように点線の□で囲んだものは、編者が、撰歌・配当した際に、二首を一对の贈答歌に仕立てたと考えられる歌である。以下同じ。

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

〔三二〕

梅の花

袖 にはへ

〔三三〕

宿の梅

袖 香

〔三四〕

宿近く梅の花

待つ人の香

〔三五〕

梅の花

人のとがむる香

三三の「思はゆれ」の主語は、この歌群から切り離せば、この歌を詠んだ「宿」の主人である。しかしこの歌群の中では、三三の「梅の花ありとやここに・鳴く」「鶯」である。

三四の「待つ人」は、女が「待つ人」、つまり女のもとへ通って行く男のこと。

三五の「梅の花」は単なる「梅の花」ではなく、この歌群の中では、前三四の「宿近く」植えし「梅の花」を意味する。

「人のとがむる」は、この歌一首だけを取り上げれば、女が男に対して、「他の女の袖の移り香ではないかとなる」意である。しかしこの歌群の中では、わが家へ通ってくる男が、女に対して「他の男の移り香ではないか」となる意味に変わっている。

先の関連語句による歌の連鎖の状態から見て、この歌群は、贈答歌仕立ての二組の歌三一・三三と三四・三五からなっており、タイプはE型に準ずる。

(贈答歌風に仕立てた二首を続けて配列)

〔三二〕 折りつれば袖こそはへ梅の花

ありとやここに鶯の鳴く

〔三三〕 色よりも香こそあはれと思ほゆれ

たが袖ふれし宿の梅ぞも

〔三四〕 宿近く梅の花植ゑじあぢきなく

待つ人の香にあやまたりけり

〔三五〕 梅の花立ちよるばかりありしより

人のとがむる香にぞしみぬる

三三は、前歌三二の「梅の花ありとやここに鶯の鳴く」を、「色よりも香こそあはれと思ほゆれ」で受けた上で、前歌の「折りつれば袖こそはへ」に對し、「たが袖ふれし宿の梅ぞも」といぶかりながら返した形に仕立てられている。

三五は、前歌三四の「待つ人の香にあやまたりけり」を、「人のとがむる香にぞしみぬる」で受け、前歌の「宿近く梅の花植ゑじあぢきなく」について、そうだったのは「梅の花立ちよるばかりありしより」と、いきさつを説明しながら返した形に仕立てられている。

三三の「色よりも香こそあはれと思ほゆれ」と、三五の「人のとが

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

むる香にぞしみぬる」は、前歌を受けた部分で、いずれも内容が重複しており、この歌群の編者は、これらの重複部分を度外視し、歌本文の残りの部分を念頭に置きながらストーリーを組み立て、歌を配列したと考えられる。

『構造』では、右の四首のうち、最初の三一・三三は、『梅の香』と、その香が存在する場所としての『袖』が共通し、その点で、両者は緊密な関係を保っている」し、後の三四・三五は、同じ梅の香を中心に詠んでいても、「待つ人の香にあやまたれ」る香と、「人のとがむる香」である点に両歌の類似が見出せると指摘しているが(一八二頁)、これは『構造』の考察が、語句の共通性による歌の連鎖の範囲、つまり撰歌と配当の範囲に留まっており、配列と、配列に見られる規則性にまでは及んでいないことを示している。

因みに、すでに見た織田氏の考察方法も、事実上、こうした『構造』のそれに追隨して、単なる語句の共通性による歌の連鎖の発見に終始し、『構造』の考察方法がもっている限界を越えることはなかった。

この歌群の歌の配列は、E型に準ずる。

(歌群の大意)

〔三二〕 梅の花を折ったので、その移り香で私の袖はこんなにも匂っているのだが、鶯は、梅の花がここにあると思ってか、私の袖で鳴いている。

〔三三〕 いったい誰の袖が触れて、香がこんなにもすばらしいのでしょうか、わが家の梅の花は。

〔三四〕 しかしこれからは、わが家の軒近くに梅の花など植えますまい。つまらないことに、その香を、私が待っていた男の人に、他の男の衣の香ではないかと間違えられてしまいました。

〔三五〕 私は、わが家の梅の花のもとに、ほんの少し近づいただけだったのに、それ以来。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

この歌群は、次の歌群「梅の花を折りて」と、左記の関連語句によって連鎖している。

三五 梅の花
三六 梅の花

2 「梅の花を折りて」

三六 鶯の花を折りてよめる 東三条の左のおはいまうち君
鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと

素性法師
題しらず

三七 よそにのみあはれとぞ見し梅の花

あかぬ色香は折りてなりけり

梅の花を折りて人におくりける 友則

三八 君ならでたれにか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る
(歌群の主題を示す語句) (その他の関連語句)

三六 梅の花折りて

三七 梅の花・折りて 色香

三八 梅の花 色をも香をも

見し
見せむ

三六 鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと
(贈答歌風に仕立てた二首を核とした配列)

三七 よそにのみあはれとぞ見し梅の花

あかぬ色香は折りてなりけり

三八 君ならでたれにか見せむ梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

三七は、前歌三六が「梅の花折りてかざさむ」と詠んでいるのを、「よそにのみあはれとぞ見し梅の花」と受け、さらに前歌が「老いかくるやと」と詠んでいるのを、やはり「あかぬ色香は折りてなりけり」

と受け、二首一対の贈答風に仕立てられている。

三八は、前歌三七の「よそにのみあはれとぞ見し梅の花」を「君ならでたれにか見せむ梅の花」で受け、前歌の「あかぬ色香は折りてなりけり」に対し「色をも香をも知る人ぞ知る」と返している。

この歌群からは、編者の老人へのいたわりの心が伝わってくる。

この歌群では、三七の作者・素性法師は、三六の作者・東三条の左のおはいまうち君(東三条左大臣) 源常(みなもとときわ)の代役を務めている。B型に準ずる歌群。

(歌群の大意)

三六 鶯が青柳を使って縫いあげて花笠をつくると歌にもいう
梅の花を折り取って、髪に挿そう。もしかして、私のこの
老いの顔が隠れるかと思つて。

三七 これまでは、ただ遠くから美しいと思つて見ていた梅の花だった。

三八 梅の花のすばらしさは、あなたのように、色も香も分かる人だけが、本当に味わうことができるものです。

(次の歌群と繋いでいる語句)

三八 梅の花
三九 梅の花

3 「夜の梅が香」

くらぶ山にてよめる

貫之

三九 梅の花にほふ春べはくらぶ山

闇に越ゆれどしるくぞありけり
月夜に梅の花を折りてと、人のいひかれは折るとよめる

躬恒

四〇 月夜にはそれとも見えず梅の花

香をたづねてぞしるべかりける

春の夜、梅の花をよめる

四一 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ

初瀬にまうづるごとに、宿りける人の家に、
久しく宿らで、程へて後にいたれりければ、
かの家のあるじ、かくさだかなむ宿りはあ
ると、いひ出して侍りければ、そこに立てり
ける梅の花を折りてよめる

貫之

四二 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける

(歌群の主題を示す語句) (その他の関連語句)

三九 梅の花 闇に にはふ

四〇 梅の花 月夜には 香をたづね するくぞありけり

四一 梅の花 春の夜の闇 香やはかくるゝ見えね

あやなし

四二 花 知らず 昔の香にほひける

四二の「梅の花」が咲いている時間帯は、歌の本文と詞書からは分らない。しかし四二の「昔の香」は、この歌群の中では、前歌四一の「春の夜の闇」に隠れぬ「香」と関連し連鎖している。したがって四二の「昔の香」は、単なる「昔の香」ではなく、「春の夜の闇」に隠れぬ「昔の香」であり、この歌群の中では、貫之が宿へ着いたのも、日が暮れてからということになり、辺りはすでに暗くなっていたが、貫之は、前歌四一の「色こそ見えね香やはかくるゝ」を踏まえ、宿の主人に「かくさだかなむ梅の花はある」という意味を言外に含めながら詠んで返した形になっている。

(贈答歌風に仕立てた二首を核とした配列)

三九 梅の花にほふ春べはくらぶ山

闇に越ゆれどしるくぞありけり

四〇 月夜にはそれとも見えぬ梅の花

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

香をたづねてぞしるべかりける

四一 春の夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

四二 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける
まず貫之の歌三九と躬恒の歌四〇について。

四〇は、前歌三九の「梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれど」を「月夜にはそれとも見えぬ梅の花」で受け、さらに前歌の「闇に越ゆれどしるくぞありけり」に対して、「香をたづねてぞしるべかりける」と返した形に仕立てられている。

次の躬恒の歌四一は、前歌四一と同じ作者の躬恒が、自分の詠んだ前歌四〇に続けてさらにもう一度、貫之の歌三九の「闇に越ゆれどしるくぞありけり」を、「春の夜の闇はあやなし梅の花」で受け、前歌の「香をたづねてぞしるべかりける」に付け加え、それにしても「色こそ見えね香やはかくるゝ」と感嘆しながら返している。

最後の貫之の歌四二について。

この歌は、詞書にあるように、貫之が初瀬詣での帰りに、なじみの宿へ着いた時、宿の主人が、外にいる貫之に向かって中から「かくさだかなむ宿りはある」と言ったのに対して応えた歌である。したがってこの歌の初句にいう「人」は、宿の主人を指している。

しかしこの歌群の中では、貫之の歌四二は、躬恒の前歌四一の「春の夜の闇はあやなし」を「人はいさ心も知らず」と受け、続いて前歌の「色こそ見えね香やはかくるゝ」に對し、このように「ふるさは花ぞ昔の香にほひける」と返している。

貫之の歌四二は、この歌群の中では、「人」は「春の夜の闇はあやなし」と言うかも知れないが、その「心も知らず」「ふるさは花ぞ昔の香にほひける」というのであり、「人」も、宿の主人ではなく、

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

前歌の作者・躬恒のように「春の夜の闇はあやなし」と言う「人」を意味している。歌の焦点も、この四二だけを取り上げる場合には、どちらかという宿の主人の心に合わされているが、この歌群の中では、むしろ春の夜に宿の前に匂う「梅が香」に合わせたものに変化していると考えられる。

この歌群の先頭歌三九の詞書にある「くらぶ山(暗部山)」の所在については伊賀・近江・山城と諸説あって今のところ未確定であるが、この歌の作者が貫之であることや四二の詞書の内容から推して、この歌群の編者は、貫之が、同行者たちと暗いうちに京を出立して初瀬詣でを終え、日が暮れてからなじみの宿に着いた折りのことを思いだしながら編んだものと考えられ、歌群の主題は「夜の梅が香」であって、四二の詞書にある貫之と宿の主人とのやりとりは、この歌物語の中では後背に退いている。

この歌群はC型に準ずる歌群である。

『構造』では、三九・四〇・四一を「春の夜の梅」の歌群とし、貫之の四二は、次の伊勢の二首とともに第四の歌群に含められているが、「夜の梅」を「水辺の梅」と一緒に扱うのは無理である。

四二の「花」は、この歌群の中では、前歌四一の「梅の花」と同じであり、同じく四二の「昔の香」も、前歌の「色こそ見えね香やはかくる」の「香」と同じ「香」であり、四二は、四一とこうした関連語句によって密接に連鎖している。

(歌群の大意)

三九 (貫之) 梅の花の匂っている春さきは、昼でも暗いという名のくらぶ山を闇夜に越えても、その匂いで梅の花がどこに咲いているかがはっきり分かるなあ。

四〇 (躬恒) (月の光が明るくて梅の花を見分けにくい) 月夜でも、香をたづねていけばそのありかは分かるものだが、

四一 (躬恒) それにしても、春の夜の闇は、本当に筋の通ら

ないことをするものだなあ。

四二 (貫之) (そう言われるあなたの心は、さあ、私には何ともはかりかねるが) しかし昔なじみのこの宿では、あなたの言うように暗闇の中で、梅の花は昔ながらの懐かしい香りをただよわせていることだなあ。

(次の歌群と繋いでいる語句)

四一 花
四二 花
四三 花

4 「水辺の梅」

水のほとりに、梅の花咲けりけるをよめる 伊勢

四三 春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖や濡れなむ

四四 年をへて花の鏡となる水はちりかかるといふらむ

(歌群の主題を示す語句) (その他の共通語句)

四三 折られぬ水・花と見て 春ごとに

四四 花の鏡となる水 年をへて

(贈答歌風に仕立てた配列)

四三 春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖や濡れなむ

四四 年をへて花の鏡となる水は

ちりかかるといふらむ

この歌群は、四三の作者・伊勢の自問自答歌に仕立てられている。

まず四四は、前歌四三の「春ごとに流るゝ川を花と見て」を「年をへて花の鏡となる水は」で受け、前歌の「折られぬ水に袖や濡れなむ」に対し、「ちりかかるといふらむ」と返している。

この歌群はA型に準ずる。

(歌群の大意)

四三 春が来るごとに、流れている川面に映っている花影を本

当の花と見て、折ることのできない花を映している水に袖を濡らし、

四四 (花影の映っているその川面に、やがて) 花が散りかかるのを、鏡に塵がかかるのと同じように、曇るというのでしょうか。

(次の歌群と繋いでいる語句)

四四 花 ちりかゝる
四五 梅の花 うつろひぬ

5 「散りゆく梅」

家にありける梅の花の散りけるをよめる

貫之

四五 暮ると明くとめかれぬものを梅の花

いつの人まにうつろひぬらむ

寛大平御時后宮の宮の歌合の歌

よみ人しらす

四六 梅が香を袖に移してとどめてば春は過ぐともかたみならまし

四七 散ると見てあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる

題しらず

読人しらす

四八 散りぬとも香をだに残せ梅の花恋しきときの思ひいでにせむ

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

四五 梅の花 うつろひぬ

四六 梅が香 袖に移してとどめてば

かたみならまし

四七 梅の花 散ると見てあるべき

にほひ・袖にとまれる

四八 梅の花 散りぬとも

香 思ひいで

(贈答歌風に仕立てた二首を核とした配列)

四五 暮ると明くとめかれぬものを梅の花

いつの人まにうつろひぬらむ

四六 梅が香を袖に移してとどめてば

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

春は過ぐともかたみならまし

四七 散ると見てあるべきものを梅の花

うたてにほひの袖にとまれる

四八 散りぬとも香をだに残せ梅の花

恋しきときの思ひいでにせむ

この歌群は、贈答歌に仕立てた四五と四六を核とし、これに四七と四八を追加して編んでおり、C型に準ずる歌群である。

四六は、前歌四五の「暮ると明くとめかれぬものを梅の花」を、いっそのこと「梅が香を袖に移してとどめてば」で受け、前歌の「いつの人まにうつろひぬらむ」に対し「春は過ぐともかたみならまし」と返した形になっている。

次の四七は、前歌四六の「梅が香を袖に移してとどめてば」を「散ると見てあるべきものを梅の花」で受け、前歌の「春は過ぐともかたみならまし」に対し、しかしそれでは「うたてにほひの袖にとまれる」と応じ、梅を手折ったために袖に香がしみついて消えやらぬことを気にしている。

最後の四八は、前歌四七の「散ると見てあるべきものを梅の花」を「散りぬとも香をだに残せ梅の花」で受け、前歌の「うたてにほひの袖にとまれる」と応じた形に仕立てられている。

(歌群の大意)

四五 明けても暮れてもずっと目を離すことなかったのに、この梅の花は、いったいいつ、人の見ていない間に散ってしまっただろう。

四六 この梅の香を袖に移してそのまま袖に留めておけるものならと思う。

四七 (しかしそれでは却って、) 梅の香が袖にしみつきてい

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

つまでも消えないでいるのが気に入らない。

四八 (だから) たとえ散ってしまうにしても、せめて香だけは枝に残しておいておくれ、梅の花よ。(お前が恋しくなつた時、思い出すすがにしたいので。)

以上に見てきた『古今集』の「梅」の歌群の構造を簡単にまとめる
と次のようになる。

1 歌番号三二一から四八に至る一七首首の歌が、「咲く梅」と「散りゆく梅」の二つの歌群に分かれ、このうち「咲く梅」の歌群は1「移り香」・2「梅の花を折りて」・3「夜の梅」・4「水辺の梅」の四つの小歌群に分かれ、「梅」の歌群全体としては五つの歌群から成っている。

2 五つの各歌群は、編者によって贈答歌風に仕立てられた二首の歌を核とし、それぞれE・B・C・A・C型に準ずる歌群として編まれ、「梅の花」の推移に沿って配列されている。

(二)『新古今集』の「梅」の歌群の構造

『新古今集』の「梅」の歌群は、三九から五四までの一六首から成っている。『新大系版』は、三九の脚注でこの歌群について、「以下五四まで『梅』と指摘し、五一の脚注で、「五〇から落花」と指摘するにとどまっているが、もう少し丁寧に見ておきたい。

巻第一 春歌上 梅

1 「梅が香」

如月梅の花さき侍らざりける年、よみ侍ける 中務

〔三九〕 しるらめや霞の空をながめつつ花もにははぬ春をなげくと

守覚法親王家五十首歌に 藤原定家朝臣

〔四〇〕 おほぞらは梅のにはひに霞みつつくもりもはてぬ春の夜の月

題しらず 宇治前関白太政大臣

四一 おられけりくれなるにほふ梅の花けさしろたへに雪はふれれど

(歌群の主題を示す語句) (その他の関連語句)

〔三九〕 春 花もにははぬ

霞の空

〔四〇〕 春の夜 梅のにはひ

霞みつつ・おほぞら

四一 けさ 梅の花・くれなるにほふ

(贈答歌風に仕立てた二首を核とした配列)

〔三九〕 しるらめや霞の空をながめつつ

花もにははぬ春をなげくと

〔四〇〕 おほぞらは梅のにはひに霞みつつ

くもりもはてぬ春の夜の月

四一 おられけりくれなるにほふ梅の花

けさしろたへに雪はふれれど

この歌群は、三九・昨日までの「梅」↓四〇・昨夜の「梅」↓四一・今朝の「梅」の順に時間的推移に沿って配列されている。

まず四〇は、前歌三九が、「しるらめや霞の空をながめつつ」と詠んだのを、しかし今夜は「くもりもはてぬ春の夜の月」で受け、前歌が、昨日までは「花もにははぬ春をなげくと」詠んだのに対し、しかし今夜は「おほぞらは梅のにはひに霞みつつ」と返した形に仕立てられている。

次の四一は、前歌四〇が「おほぞらは梅のにはひに霞みつつ」と詠んだのを、しかし「けさしろたへに雪はふれれど」で受け、前歌の「おほぞらは梅のにはひに霞みつつ」とただ眺めていたのに対し、その「くれなるにほふ梅の花」を「おられけり」と返した形に仕立てられ、歌群が締めくくられている。

(歌群の大意)

〔三九〕 (中務) 梅よ。お前は分かっているであろうか。昨日ま

では、私が、霞む空をじっと眺めながら、まだお前の香が匂ってこない春を歎いていたと。

四〇 (定家) (しかし昨夜は、昨日までとうって変わって) 春の月夜の大空は梅の芳香に霞んでいた。

四一 (宇治II定家) (そして) 今朝は、私は紅の色も鮮やかな梅の花を折ることができたよ。

この歌群はC型に準ずる歌群である。

(次の歌群と繋いでいる語句)

四一 梅の花

四二 梅

2 「梅が香をたづねる」

垣根の梅をよみ侍りける

藤原敦家朝臣

四二 あるじをば誰ともわかず春はただ垣根の梅をたづねてぞみる

梅花遠薫といへる心をよみ侍りける

源俊頼朝臣

四三 心あらばとはましものを梅が香にたが里よりかにほひ来つらん

(歌群の主題を示す語句)

(その他の共通語句)

四二 垣根の梅

たづねてぞみる

四三 梅が香・にほひ来つ とはましものを

四三の「と(問)はましものを」は、前歌四二の「たづ(訪)ねてぞみる」と連鎖しており、この歌群の中では、「たづ(訪)ねて・と(問)はましものを」の意。

(贈答歌風に仕立てた配列)

四二 あるじをば誰ともわかず春はただ

四三 垣根の梅をたづねてぞみる

垣根の梅をたづねてぞみる

四三 心あらばとはましものを梅が香に

たが里よりかにほひ来つらん

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

四三は、前歌四二の「垣根の梅をたづねてぞみる」を「心あらばとはましものを梅が香に」で受け、前歌の「あるじをば誰ともわかず」に対し「たが里よりかにほひ来つらん」と応じた形に仕立てられている。

(歌群の大意)

四二 私は、家の主が誰であろうと構わず、春はただ垣根の梅だけを訪ねて、

四三 できることなら梅の香に聞きたいものだ―「お前は、誰が住んでいる里から、この垣根の梅へと匂ってきたのか」と。

四三は、遠くに住んでいるゆかしい人に思いを馳せながら、その人の袖の移り香では、と詠んだ歌。A型に準ずる歌群。

(次の歌群と繋いでいる語句)

四三 梅が香

四四 梅の花・にほひ

3 「梅の花と月かけ」

百首歌たてまつりし時

藤原定家朝臣

四四 梅の花にほひをうつす袖のうへに軒もる月のかげぞあらそふ

四五 梅が香に昔をとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる

千五百番の歌合に

右衛門督通具

四六 梅の花たが袖ふれしにほひぞと春や昔の月にとはばや

皇太后宮大夫俊成

四七 梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の月

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

四四 梅の花 月のかげ あらそふ

四五 梅が香 春の月・かけ

袖にうつれる 昔

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

四六 梅の花 昔の月 袖ふれしにほひ

四七 梅の花 春の夜の月 あかぬ色香 昔

(贈答歌風に仕立てた二首を核とした配列)

四四 梅の花にほひをうつす袖のうへに

軒もる月のかげぞあらそふ

四五 梅が香に昔をとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる

四六 梅の花たが袖ふれしにほひぞと春や昔の月にとはばや

四七 梅の花あかぬ色香も昔にておなじかたみの春の夜の月

この歌群は、『伊勢物語』第四段から採られ『古今集』巻第一五「恋歌五」の巻頭に置かれた、業平の失意の恋を回想して詠んだ次の歌が下敷きになっている。

七四七 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

先頭の定家の歌四四は、歌群の序歌の役を果たしており、この歌の「袖の上に・あらそふ」「梅の花」と「月のかげ」のうち、四五で、まず「袖の上に・にはひをうつす・梅の花」の「香に昔をとへば」、「梅が香」同様に「春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる」と詠んでいる。

次の四六は、前歌四五の「梅が香に昔をとへば」を受け、素知らぬ顔をして、「梅の花たが袖ふれしにほひぞと」言いながら、ただ「春や昔の月にとはばや」と返すだけ。

こうした四五と四六のやりとりを受けて、四七は、所詮、「梅の花」も「おなじかたみの春の夜の月」と結んでいる。

この歌群は、四五と四六が贈答歌風に仕立てられ、この前後に四四と四七が組み合わされており、E型に準ずる歌群である。

(歌群の大意)

四四 梅の花が匂いを移し、涙に濡れた私の袖の上で、軒端を

洩れてくる月の光が、われ劣らじと梅の匂いと争っているかのように見える。

四四 その梅の香に誘われ、昔のことを思い出して尋ねると、梅の香は、ただ「昔ながらの春のあの月に聞いてみては」と答えるだけ。

四七 梅の花の飽きることのない色香と同じように、月も、昔と変わらずにただ過ぎし日の恋の形見として照っているだけである。

(次の歌群と繋いでいる語句)

四七 梅の花 かたみ
四八 梅の花 なぐさめ

4 「宿の梅」

梅花にそへて大式三位につかはしける

権中納言定頼

四八 見ぬ人によそへて見づる梅の花ちりなん後のなぐさめぞな

返し

大式三位

四九 春ごとに心をしむる花の枝にたがなほざりの袖かふれつる

二月雪落衣をいふことをよみ侍ける

康資王母

五〇 梅ちらす風もこゑてや吹きつらんかほれる雪の袖にみだるゝ

題しらず

西行法師

五一 とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人はおりにこそよれ

百首歌たてまつりしに、春歌

式子内親王

五二 ながめつるけふは昔になりぬとも軒端の梅はわれをわするな

この歌群は、四八と四九がもと贈答歌で、これを核とした配列になっており、C型の歌群である。

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

四八 梅の花 よそへて見づる
四九 花の枝 心をしむる

見ぬ人
た(誰)

五〇 梅・かほれる雪 袖にみだるる

五一 梅さかりなるわが宿 とめこかし

五二 梅・われをわするな

五〇の「梅」は、この歌群の中では四八・四九の「梅の花」「花」と同じ。

(贈答歌を核とした配列)

四八 見ぬ人によそへて見つる梅の花

ちりなん後のなぐさめぞなき

四九 春ごとに心をしむる花の枝に

たがなほざりの袖かふれつる

五〇 梅ちらす風もこゑてや吹きつらん

かほれる雪の袖にみだるゝ

五一 とめこかし梅さかりなるわが宿を

うときも人はおりにこぞよれ

五二 ながめつるけふは昔になりぬとも

軒端の梅はわれをわするな

『新大系版』の五一の脚注は、『梅』歌群の中でも四八から落花が予想され、五〇から落花。その中で五一が『さかり』の歌なのは疑問。』と指摘しているが、この疑問は、関連する語句による歌の連鎖という視点が欠落しているため、この歌群から五〇だけを切り離して観察したために生じた誤解によるものである。

五〇の「梅ちらす風」の中の「梅」は、この歌群の中では、単なる「梅」ではなく、定頼が四八で言う「見ぬ人によそへて見つる梅の花」の中から折り採って大式三位に贈った「梅の花」であり、四九で大式

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

三位が言う「春ごとに心をしむる花」である。

次に、「梅ちらす風」は、「香ほれる雪の袖にみだるゝ」を見て、「吹きつらん」と言っているのであるが、五〇だけを採り上げる場合には、この歌は、気付かないうちに風が吹いて花を袖に散らしたという意味の歌であり、詞書にも「二月雪落衣」とある。

しかしこの歌群の中では、大式三位が、定頼から贈られた「花の枝」をじっと見つめながら「たがなをざりの袖かふれつる」と、あれこれ考えているうちに頭にいささか血が上って、「花の枝」を乱暴に振るなどしたのであろう、「かほれる雪の袖にみだるゝ」ことになり、大式三位役をあてがわれた康資王母が、「梅ちらす風もこゑてや吹きつらん」ととぼけて見せたのである。「梅」をちらしたのは「こゑてや吹きつらん風」ではなくて大式三位だったのである。

『新大系版』のように、五〇を独立した歌と見ると、歌の配列に乱れがあるかのような錯覚に陥るだけでなく、五〇がこの歌群の中でもっている新しい意味も、この歌群が歌物語としてもっている面白さも分からなくなってしまう。

五一の作者・西行法師と五二の作者・式子内親王は、この歌群では定頼と大式三位の代役をになわされていると考えられる。

(歌群の大意)

四八 (男) 久しくお逢いしていないあなたの身代わりとして

眺めておりましたこの梅の花が、散ってしまうと、その後は、私の心を慰めてくれるものは何もありません。

四九 (女) (本当にそうでしょうか。それなら) あなたが贈ってこられたこの梅の花に、いったいあなたが気まぐれに袖を触れて香を移されたのでしょうか。

五〇 (女) 梅の花を散らす風でも頭を越えて吹いてきたのでしゅうか、香のする雪が私の袖に降り乱れていますよ。

五一 (男) (そんなこと言わずに) 訪ねて来て下さいよ、花

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

盛りの私の家を。

五二 (女) こうして物思いにふけりながらじっと見入っている
今日が昔のことになってしまおうとしても、軒端の梅よ、
お前は私のことを忘れないでくれよ。

(次の歌群と繋いでいる語句)

五二 梅

五三 梅の花

5 「花散りぬ」

土御門内大臣の家に、梅花留袖といふ事を

よみ侍けるを

藤原有家朝臣

五三

散りぬればにはひばかりを梅の花ありとや袖に春風のふく
題しらず

八条院高倉

五四

ひとりのみながめて散りぬ梅の花
知るばかりなる人はとひこず

(歌群の主題を示す語句)

(その他の関連語句)

五三

梅の花・散りぬ

袖に春風のふく

五四

梅の花・散りぬ

人はとひこず

(贈答歌に似た配列)

五三

散りぬればにはひばかりを梅の花ありとや袖に春風のふく

五四

ひとりのみながめて散りぬ梅の花

知るばかりなる人はとひこず

五四は、前歌五三の「散りぬればにはひばかりを梅の花」を「ひとりのみながめて散りぬ梅の花」で受け、前歌の「ありとや袖に春風のふく」に対して、「知るばかりなる人はとひこず」と応じた形に仕立てられている。A型に準じた歌群。

(歌群の大意)

五三 梅の花は散ってしまったので、今は移り香だけが袖に残っているにすぎないのに、まだ梅の花が咲いていると思っただ、袖に春風が吹いているが、

五四

この梅の花の本当の良さが分かるほどの人は訪ねて来ない。

以上の『新古今集』の「梅」の歌群の構造の考察を終わる。『新古今集』の「梅」の歌群の構造も、先に見た『古今集』のそれと基本的に同じで、次のようになっている。

1 歌番号三九から五四に至る一六首の歌が、まず「咲く梅」と「散る梅」の二つの歌群に分かれ、「咲く梅」の歌群はさらに1「梅が香」・2「梅が香をたづねる」・3「梅の花と月かげ」・4「宿の梅」の四つの小歌群に分かれ、最後の「花散りぬ」の小歌群と合わせ全体としては五つの歌群から構成されている。

2 各歌群は、四番目の、もともと贈答歌を含む「宿の梅」(C型)の歌群を除き、編者によって贈答歌に仕立てられた二首を核とし、それぞれC・A・E・(C)・A型に準ずる歌群として編まれ、梅の季節の時間的推移に沿って配列されている。

◇ ◇ ◇
『古今集』や『新古今集』の「梅」の歌群についての以上の考察結果を、本稿の初めに列挙した問題点に沿って要約すると――

① 歌群の中の二首一対の歌
『古今集』や『新古今集』の歌群に見られる二首一対の歌は、編者が、歌群を編むために集められた歌材の中から、歌の主題が歌群の主題と同じで、贈答と返歌にふさわしい歌を選んで贈答歌風に仕立てたもので、この二首一対の歌が歌群の核になっている。

本来の贈答歌では、贈答がもっている語句を使って返歌で返す約束になっているが、贈答歌風に仕立てられた二首の場合は、返歌は、贈答の語句を含む上句または下句で返しており、こうした形の応答を基に歌が配列されている。これは、もともと贈答歌として詠まれ

たものでない二首を贈答歌に仕立てる必要上、どうしても同じ語句を詠みこむという約束を弛めざるをえなくなった結果であろう。

二首一对の歌の前後に歌がどのように組み合わせられるかによって、歌群は、先に紹介したように五つのタイプに分かれる。

(なお、『新古今集』の各部の巻頭と巻軸に置かれた、贈答歌風の二首一对の歌についての考察は、本誌次号で行う予定である。)

② 関連語句による歌の連鎖

編者が贈歌・返歌と見なして撰んだ二首一对の歌は、同じ歌群の主題を示す語句を含んでいることが多く、したがってその他の語句(枕詞・縁語・掛詞など)も同じか似たものが多くなる。

歌群の核となる贈答歌風の二首一对の歌と、その前後に追加された歌との間にも同じようなことが言える。

こうして、歌群内部の歌は、互いに関連する語句によって、形式的にも内容的にも連鎖することになる。

③ 語句と歌の意味の変容

本来の贈答歌の場合には、関連する語句の間に意味内容の変容はまず起こりえない。しかし編者が、もともと贈答関係にない二首を撰んで贈答歌風に仕立てる場合には、その二首の語句が関連することによって、語句の、したがってまた歌の意味内容の変容が起こりがちになる。

④ 歌本文のうち、配列を決めるとき度外視される部分(□で囲まなかった部分)

前歌の語句を受けただけの部分は、意味内容が前歌と同じか似ており重複するので、歌の配列順を決める際には度外視される。

⑤ 歌物語と詞書との関係

歌物語は、詞書と歌の本文を元にして創られるフィクションである。歌群を構成している歌の詞書の中で参考にされるのは、贈答歌風に仕立てられた二首の歌に添えられている詞書であることが多い。

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

⑥ 歌物語の登場人物と歌

歌の作者と歌は、歌群の主題に沿ってフィクションとして展開される歌物語にふさわしいものが撰ばれる。

以上、『古今集』や『新古今集』の「梅」の考察結果をもとに、歌群の編集方法をまとめたが、勅撰集の歌群の編集方法については、平安時代末期の歌学者・藤原清輔(一一〇四—一一七七)の歌論書『袋草紙』に、ごく簡単ではあるが貴重な記述がある。その内容は、右のまとめと基本的に一致していると考えられるので、最後にこの記述について触れておくことにしたい。

四 歌群の編集方法に関する『袋草紙』の記述について

清輔は、『袋草紙』上巻(一一五九年(正治元)頃の作)の「撰集の故実」の項で、勅撰集の歌群の編集方法について次のように記している。

・・・・①同題の歌ならびに②返歌に似たる等、③相ひ並べし。・・・④

歌の次第漸く便に随ひてこれを書くべし。(藤岡忠美校注『袋草紙』岩波書店 新日本古典文学大系二九 一九九五年 三四頁。原文(漢文) 三五〇頁。①—④は引用者。)

① 「同題の歌」

「同題」というのは、本稿で使ってきた小歌群の主題を示す語句、例えば「梅が香」「梅が香をたづねて」といった標題を意味しているのではなく、「立春」「春雪」「梅」といったより大きな歌群の主題を意味していると考えられる。というのは、右の引用部分の最後に「これを書くべし」とあり、小歌群の編集を終える毎に一々清書していると、小歌群の内部の歌の配列を訂正する必要があることが十分考えられ、編集に手間取ると考えられるからである。

歌群の主題(標題)を同じくする二首以上の歌が、ここで言われ

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

ている「同題の歌」である。

② 「返歌に似たる等」

「返歌」は、贈答歌二首の内の「返し」の歌のことであるが、「返歌に似たる」(歌)とあるのは、「返歌」そのものではなく、本稿で使ってきた(贈答歌風の二首)の内の返歌に見立てた歌を意味しており、①の「同題の歌」の中の、贈歌に見立てた歌と対にするにふさわしい歌を指していると考えられる。

③ 「相ひ並ぶべし」

「同題の歌ならびに返歌に似たる等」を「相ひ並ぶべし」というのは、撰歌の対象である歌材の中に、「同題の歌」を見つけ、まず、その中の贈歌に似た歌と見立てた歌と、「返歌に似たる」歌とを二首一対にして歌群の核をつくることを意味していると考えられる。

なお、清輔は「返歌に似たる等」として、「返歌に似たる」歌以外の歌があることを示唆しているが、これは、(贈答歌風に仕立てられた二首)の前後に他の歌を組み合わせてつくるB型やD型・E型に準ずる歌群を念頭に置いた記述ではないかと考えられる。

④ 「歌の次第漸く便に随ひてこれを書くべし」

「歌の次第」は歌の順序、つまり先に紹介したA—E型に準ずる五つの型の中のいずれかを基本とした配列順のことであり、「便に随ひ」とは、歌の配列が都合よく整えば、ということ。本稿の考察結果からすれば、歌群毎の標題にふさわしい歌物語ができあがれば、という意味であろう。

「漸く」「便に随ひ」とあるのは、歌の配列は、A型やC型に準ずる歌群だけなら比較的簡単に済むだろう。しかしながら、B型やD型・E型に準ずる歌群や、歌群が数首以上の歌で構成されている場合には、配列の完了に多少とも手続きと時間が必要になるからであらう。

最後に、「書くべし」とあるのは、撰歌と配当並びに配列の各段

階では、編集作業に便利のように、歌が、恐らく一首ずつ詞書や作者名とともに短冊形の用紙一枚に書いてあって、歌群の歌の配列が終わり編集作業が一区切りついた段階で、歌群の歌をまとめて別の用紙に配列順に清書することを意味しているのであろう。

先に掲げた清輔の『袋草紙』上巻の記述は、勅撰集の歌群の編集方法に関するもので非常に重要であるにもかかわらず、あまりにも簡略に過ぎると思われるが、この主な原因は、清輔が『袋草紙』の読者として想定していたのが、勅撰集の編者のような歌人の中でもごく少数のエリートではなく、自分の歌が秀歌として勅撰集に採入れ入集することを願いながら、永年、一首々々の歌の創作に執着し「稽古」に努めている普通の歌人たちであったことによるのであろう。

(参考文献) — 本文に引用したものを除く —

『新編国歌大観』編集委員会編

『新編国歌大観』第一巻(勅撰集) 角川書店 一九八三年

佐伯梅友校注 『古今和歌集』日本古典文学大系八 岩波書店 一九五八年

松田武夫 『新釈古今和歌集』(上・下) 風間書房 一九六八・一九七五年

五年

小町谷照彦 『対訳古典シリーズ 古今和歌集』 旺文社 一九八八年

小島憲之・新井栄蔵校注

『古今和歌集』新日本古典文学大系五 岩波書店 一九八九年

九年

片桐洋一 『古今和歌集全評釈』(上・中・下) 講談社 一九九八年

久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注

『新古今和歌集』日本古典文学大系二八 岩波書店 一九五八年

八年

久保田淳 『新古今和歌集全評釈』第一・四・五・八巻 講談社 一九七六・一九七七年

七六・一九七七年

久保田淳校注 『新古今和歌集』(上・下) 新潮社 一九七九年

後藤重郎 『新古今和歌集の基礎的研究』 塙書房 一九六八年

後藤重郎 『新古今和歌集研究』 風間書房 二〇〇四年

藤平春男編 『古今集新古今集必携』 学燈社 一九八一年三月

小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂

『袋草紙注釈』 上・下 塙書房 一九七四・一九七六年

藤岡忠美・芦田耕一・西村加代子・中村康夫

『袋草紙考証 雑談篇』 和泉書院 一九九一年

浅田徹・藤平泉編

『古今集 新古今集の方法』 笠間書院 二〇〇四年

池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔・校註

『枕草子・紫式部日記』 日本古典文学大系一九 岩波書店

一九五八年

上坂信夫・神作光一・湯本なぎさ・鈴木美弥全訳注

『枕草子』(上・中・下) 講談社学術文庫 一九九・二〇〇三年

〇一・二〇〇三年

宗雪修三 『源氏物語歌織物』 世界思想社 二〇〇二年

増田繁男・鈴木日出男・伊井春樹編

『源氏物語研究集成』 第九卷 「源氏物語の和歌と漢詩文」

風間書房 二〇〇〇年

『新編国歌大観』 編集委員会編

『新編国歌大観』 第五卷 (歌合篇 歌学書・物語・日記等

収録歌篇) (歌集) 角川書店 一九八七年

萩谷朴・谷山茂校注

『歌合集』 日本古典文学大系七四 岩波書店 一九六五年

島津忠夫校注 『連歌集』 新潮日本古典集成 新潮社 一九七九年

谷知子 『和歌文学の基礎知識』 角川選書 二〇〇六年

久保田淳・馬場あき子編

『歌ことば歌枕大辞典』 角川書店 一九九九年

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(5)

二〇〇八・一・二八／完
(元東海女子高校教諭)